

1. 日本 (JAPAN)

鈴木 絵美留

『かわとはきもの』の読者の皆様、ミュージアムには行かれますか？履物を一つの軸として、ミュージアムを訪れてみるのはいかがでしょうか？もっと色々な人に履物が持つ文化的な側面や、履物をアートとして見ることなどを知ってもらいたいという思いがあります。(博物館、美術館、資料館と、それぞれ呼称の違いがあります。便宜上、正式名称以外では、「ミュージアム」と記していきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。)

今回、過去の『かわとはきもの』で特別に特集されていなかったこともあり、日本を飛び出して、世界にある履物に関するミュージアムのことについて記していこうと思っています。履物や皮革関連業務に従事されている方達の中でも、実は履物に関するミュージアムについて知っている方はそんなに多くないというのが個人的な感想なのです。もちろん日本にも履物を所蔵するミュージアムはいくつもあります。是非ユニークな履物に特化したミュージアムを訪れ履物の歴史や文化、デザイン、機能性、多角的に履物を見つめてほしいです。世界には日本のものと同じような履物があったり、見たこともないような、あっと驚く履物があったり、靴を作る人も、靴を履くのが好きな人も、特に靴のことを深く考えてこなかった人でも、「おもしろい！」と思える何かがきっとあるはずですよ。

「Shoe Museum」「Footwear Museum」英語でも名称がまた様々です。Shoeは日本語訳では靴のこと、(厳密には短靴を指したりしますが・・・)革を加工して作られた“クツ”をさしますが、Footwearは足に履くもの全般を表

しています。ですので、革でできたもの以外でも、履物には木から作られるもの、布から作られるもの、植物の葉や繊維から作られるものなど、多種多様な素材によって作られます。Shoe Museumだからと言って革の履物しか展示していないわけではないですし、ここでは、名称に「靴」がつかなくても、素晴らしい履物の収蔵品があるミュージアムも取り上げていきたいと思っています。読者の皆様に、まずは、「こんなに世界には履物に関する展示がされたミュージアムがある」ことを知ってほしいです。

今回第一回目は、履物を軸に観る世界のミュージアムですが、日本からスタートしていきたいと思っています。世界の中にはもちろん日本も含まれます。

この『かわとはきもの』を発行している東京都立皮革技術センター台東支所の中には「かわとはきものギャラリー」があります。最新の靴の展示もある中、靴がどのような工程で作られていくかをわかりやすく紹介するコーナーや、世界の様々な国、民族の履物や、日本の独特な伝統的な履物たちが復元品も含めて展示されています。素材も様々で、日本の伝統的な履物には、草履、わらじ、下



駄などがありますが、その中でもまた細かく用途によって大きさや形が変わっていくのも大変興味深いです。それぞれの仕事に合わせて専用の履物をたくさん生み出しています。現代でも、早く走るためだったり、足を守るためだったり、様々な用途の履物があります。また、靴・履物に関する書籍・雑誌もたくさんあり、自由に閲覧ができます。（休館日：土・日・祝日・年末年始、開館時間：9時～17時（12時～13時を除く）貸出が可能な書籍・雑誌もあります。貸出期間は2週間）



日本で履物に関するミュージアムは他にも、浅草駅前からバスに乗って10分程、台東区橋場に皮革産業資料館があります。こちらでは、皮革産業を軸に集められた履物のみならず、革に関する資料を見て学ぶことができます。カバンや革の小物入れ、野球選手のグローブやボール、スパイクなど貴重な資料を見ることもできます。我が国の革靴創業者の一人である西村勝三についての資料なども多岐に渡って展示されています。『かわとはきもの』にも長年にわたり様々な記事を執筆されていた稲川實館長のコレクションも見学できます。

（休館日：月・祝日・年末年始他、開館時間：10時～16時）

そして、日本で唯一、“はきもの”と名がつくミュージアムが、広島県福山市の「松永はきもの資料館」です。（開館日：金～日および祝日（月～木は休館です。）開館時間：10時～16時（入館は15時30分まで）

松永はかつて製塩業が盛んだった土地で、塩を煮詰める薪を使って下駄を作ってきたことから、下駄の産地として有名でした。その時の下駄工場をそのまま資料館として保存しており、下駄製造の機械が残っており展示してあります。

履物に関する資料も13000点以上収蔵しており、展示してあるのはそのごく一部のみです。是非今後、まだ収蔵庫に眠っている資料たちの展示もされたらと願っています。過去の『かわとはきもの』でも、旧日本はきもの博物館時代の学芸員の方達が様々な日本の履物について、また収蔵品の紹介も一部ではありますが写真付きで複数号に渡って紹介していますので、是非バックナンバーをご覧ください。（古いものと、インターネットでは閲覧できないのですが、皮革技術センター台東支所の「かわとはきものギャラリー」で閲覧可能です。）

『かわとはきものNo.144(2008.6)～No.151(2010.3)号』にかけて皮革に関連するミュージアムについて「かわとはきもの博物館めぐり」が掲載されていました。是非読んでいただき、訪れてほしいと思います。バックナンバーはこちらのURLで読むことができます→<https://www.hikaku.metro.tokyo.lg.jp/shisho/shien/public.html>

しかし、今はもう見学できない場所もあり、大変残念です。私がぜひ見学したいと願っている場所もあります。なお、訪問する際には事前に最新の施設利用・開館情報の確認をしてください。

大阪府吹田市にある国立民族学博物館にも、様々な民族の衣装とともに履物が多数展示されています。他にも、大分県日田市にある民営の天領日田はきもの資料館では、特産品の日田下駄をはじめ様々な下駄を見学することができます。まだまだ紹介したい施設はありますが、また次回。

（写真は都立皮革技術センター台東支所内「かわとはきものコーナー」）